昭和初期　共立での結婚式と葬式　後藤護

『共立百年史　思い出のままに』からの抜粋・編集

（略）当時の結婚式はほとんどが冬期間に、両家を馬そりで往復したもので、嫁の家に昼時に婿入りし、嫁の家ではこれが立ち振る舞いで、夕方に婿の家に嫁入りしたものです。

当時は班内と親戚くらいが集まり、料理長は森脇喜一氏、副は羽石カアヤンがなったものです。青年たちは若干のお祝いを出し、祝い酒と肴を頂戴して厩舎などで飲んだものでした。

これは昭和37年頃まで続いた後、今のような会費制になった。

昭和40年代までの葬式は、お通夜も葬式も家で行っていました。組内の男たちは花造り、墓標、棺箱、位牌、祭壇を造り、婦人たちは料理の手伝いで一人ひとりお膳でオトキを20人くらいずつ出しては交代して食べてもらったもので、葬儀の当日は、それは大変なものでした。

当時は岩見講という会があり、農閑期には各戸回り番で、高さ1尺、幅3尺角の台座を造り、その台座上で住職が説教をしたものでした。

葬儀に使うお膳や什器、お椀、おひつなど20人分の用意は、岩見講のものを借りて使ったものです。

＊注：会費制結婚式

昭和33年　会費制結婚祝賀会方式実施（新生活運動）（富丘百年史）

昭和35年　新生活運動として青年研修所で会費制（３００円）結婚式祝賀会方式実施

（岐阜区開基百年記念史）